
花街～菖蒲～

近江駟琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花街〜菖蒲〜

【Nコード】

N2045Q

【作者名】

近江駆琉

【あらすじ】

『花街』。そこは『外』と隔離された歓楽街。菖蒲はその中でも高級娼館である紅伽楼コウガロウの花魁であった。夢に向かって前向きに暮らしていた菖蒲が出会ったのは、先に夢をかなえた人物であり、客でも花街の人間でもない『外』の男、遠藤だった。遠藤に出会い、菖蒲は夢に向かっていく。

一華

からん…ころん…

日が落ち、賑わい始める花街。高級娼館『紅伽楼』コウガロウでも、見世の準備がせわしく行われていた。

そんな喧騒はどこ吹く風、とばかりに、その広い中庭で一人の遊女が散歩をしていた。

年の頃は二十歳に届いた位だろうか。しつとりと濡れたように輝く長い黒髪を背に下ろしたまま、鮮やかな深紅の布地に金の刺繍の入った着物を纏っていた。

下駄を軽やかに鳴らしながら、まわりを気にするでもなくゆつくりと歩き、時たま咲き誇っている花ばなに視線を落としている。

「見ない顔だな…」

その姿を楼の2階から見下ろしながら呟くと、それに気付いたこの主人である藤里が庭に目を向けた。

「ああ、菖蒲ショウブですよ。あの子が外に出ているなんて珍しい。今日は客をとらないつもりなのかな？」

優美な着物は花魁の証。だが、この時間にゆっくりしているということは、どこかの旦那が彼女の時間を買ひ占めているか、今日は見世に出ないかどちらかだ。

「菖蒲は昼でもあまり外に出ないから今まで会わなかったのでしょう。よく働かし、旦那もたくさんついてる家の売れっ子ですよ」

「ふうん…」

遠目だが、高級娼婦にふさわしい、美しい顔立ちをしているのがわかる。

パチン…

「王手」

しばらくぼんやりと女の姿を眺めていたが、その声で視線を将棋盤に戻す。今は賭け将棋の真つ最中であつたのだ。

「…お前、俺が見てない間に駒を動かしただろ。」

「そんなわけですよ。さあ、早く打ってください」

一手前までは優勢だと思っていた盤上は、藤里の一手で絶望的な状況になっていた。悩む俺に対して、藤里はいつもと変わらずにニコニコしながら急かしてくる。

「だめだな、俺の負けだ。ちっ……」

俺はしばらく悩んだが逃げ道がないことがわかりあっさりと投げ出した。だめなものは粘ってもし彼方ない。負けた俺は流儀にならうて、盃の酒を一気に飲みほした。

「さて……これで3勝0敗。まさか盃3杯で酔いがまわりはしませんよね？もうひと勝負といきましょう。」

日が落ちて、もう一刻もしないうちに見世を開ける時刻だというのに藤里は気にもとめない様子で言う。

「まったく……見世はいいのか？将棋なんてしてないで仕事しろよ」

そう言いつつも一度も勝てずに終わりにするのは癪なので盤に駒を並べなおす。

ふと中庭を見るともうそこに菖蒲の姿はなかった。

二華

すつ…と音もなく紅伽楼の重厚な門が開かれると、既に道に停められた黒塗りの車からさっそく幾人かの旦那が降りてくる。

「いらつしゃいまし」

「ようこそ紅伽楼へ」

「おひさしゅうございます」

見世の入り口では下仕えである遣り手や、花魁見習いの禿カムロが客の相手を始めている。変わっていく雰囲気をどこか遠くで感じていると、部屋付きの禿が声をかけてきた。日頃菖蒲は客を取らない事がないため、どうすればいいか困ってしまったらしい。

「あなたも今日は好きにしなさい。お仕事をしてる人の邪魔にならないようにね」

そう言つて禿を下げさせお茶の準備を始める。今日は前々から頼んでおいた本屋が『外』から来る予定なのである。花街に昼間出入りする事が許されているのは一部の業者だけなため、そこから手に入らないものは、わざわざ夜に見世に来て、届けてもらつてもらうしかないのだ。

（見世が開いている日に客をとらないなんていつぶりだろう…）

他の遊女が働いている中、自分ひとりが休むのはなんだか申し訳ない気持ちになる。だから、遊女のなかには客をよくふって休む者もいるが、菖蒲は求められるかぎり応えてきた。

そうしてなんだか落ち着かない気分でいるうちに、遣り手が待っていた馴染み本屋を部屋に案内してきた。いつもなら、見世が休みの日に来てもらっているので、楼を満たす艶やかな空気に戸惑いながら本屋はいくつかの書物を置いていった。

（…花街のなかにも大きな書店くらいあればいいのに）

この花街は機能的には『外』の世界と変わりはない。役所、病院、デパート、娯楽施設まで一通りの施設がそろって町なのだ。しかし、菖蒲の求めるような専門的なものまでは網羅していない。

そうだったものは、『外』の世界から取り寄せなければならない。

三華

「おや…こんな時間に珍しい。誰の所に来ていたんだい？」

見世はとつくにあいたのに、藤里は相変わらず俺と将棋を打っていた。するとそこに、客以外の外部の人間の訪問の報告がきた。

「こんな時間に来るなら間夫だろうよ」

花代を払わずに登楼する人間なんて、それ以外に何があるというのか。将棋盤を睨み付けながら俺が指摘する。なかなか次の手が決まらないのだ。

「菖蒲さんに。いつもの本屋ですよ。」

「へえ…いつもの、ね。いいのか？」

あまり待たせるのは格好がつかなくて、パチンと駒を打ちながら藤里に言う。金にならない間夫なんて、楼にしてみれば疎ましい存在だ。しかし、藤里はパチリと嫌な手を打ちながら飄々答えてくる。

「間夫じゃないですよ。菖蒲は趣味の関係の本をよく取り寄せていますから」

「へえ…花街じゃ手に入らないような本を好むなんて珍しいな」

藤里の手に、とうとう格好もなく悩んで俺は長考せざるを得なくなつた俺に、藤里もた盃を干すのに飽きたのか、提案をしてきた。

「もうこれで8勝0敗ですし、これで終わりにしましょうか。その代わり、私が勝つたら菖蒲に教えてあげてくださいませんか？」

「うつせえな…将棋は苦手なんだよ。教えるって何を」

結局あれから5戦もしているのに、未だに俺の白星はない。これが地だとわかっていても笑みを崩さずに、過激なことを言う藤里にいらいらしてきた。

（ここで金を動かすのはな…）

「あなたの専門分野でしょう。洋画ですよ。…さあ早く打ってください。」

「あー…よしっ、どうだ!!」

藤里の言葉を聞き流しながら、俺はやつと活路を開く一手を見つけた。パチリ、と乾いた音がこの時ばかりはいつも以上に良い音に聞こえる。

「いい手ですね……」

「菖蒲は洋画がすきなのか？まあいいぜ。その代わり俺が勝ったらお前の酒のコレクションから一つもらう」

今日初めて藤里の手が止まる。それに気を良くして、俺はその賭けを飲んだ。藤里のコレクションは遊郭の主人なだけあって豊富だ。

「どうぞ……はい、王手です」

しかし、平然と藤里は終わりを告げた。

四華

ざわざわ客が明けの闇のなかを帰っていく。花街の昔からの習わしで、客は夜明け前には帰らなければならない。夜が明けてしまうと大門が閉められて、客は別の小さな門から帰ることはできるが、その日は楼に泊まるとみなされその分料金がかかるのである。

「またいらつしやいまし」

「お別れするのが寂しゅうございます」

「お体に気をつけて」

豪奢な着物を艶かしく羽織った遊女達が客を見送る光景は、花も黙ってしまふような煌びやかさである。そんな光景を菖蒲が2階の廊下から眺めていると主人が声をかけてきた。

「おはよう、菖蒲。昨夜は客を取らなかつたんだね」

「藤里様、おはようございます。すみません、勝手にしてしまい…」

たまに休みを取ることなんて珍しいことでも、悪いことでもないけれど、なんだか気まずくて謝ると藤里はにっこりとしていた。

「たまにはいいさ。姫榊ヒメカキのように働く日の方が少ないようじゃ困るけどな。『外』の本屋が来ていたんだろつ、洋画の関係かい？」

「ええ…あの、そちらの方は？旦那様ですか？」

藤里の隣にいる、見たことのない男性。誰か遊女の旦那ならそれなりの態度を取るべきだが、なんだか雰囲気が違う。どこかの楼の主人だろうか。先ほどから気になっていたのは、自分をまじまじと見ている男の視線だ。

「ああ、彼は遠藤さんと言って洋画家でいらっしゃる。ちょうど菖蒲に紹介しようと思っていたんだよ。『外』の方だが誰かの旦那様ではないからね」

「遠藤要だ。よろしくな、菖蒲」

洋画家の先生、と聞いて私は驚き、客でも、花街の関係者でもない一人の男性にどう接していいかわからなくなってしまった。困っている私に、遠藤様は手を差しのべてきた。多分、握手を求めているのだ。慣れない挨拶に、おずおずと手を差し出すと、温かく、大きな手がそつと私の手を包み込んだ。

「菖蒲と申します。どうぞよろしくお願いいたします。」

五華

なぜか怖々と手を差し出してくる菖蒲に、とりあえず怖がらせないように、と俺はその白魚のような手を包み込むようにして握った。近くで見るその顔は思っていたよりずっと幼くて、昨夕に中庭を歩いていた時のしつとりと色香をにじませた彼女とは、ずいぶん印象が違う。

（…意外だな。こんなに幼い顔立ちだったのか）

「…あ、あの…」

ついつい、じつと観察していると、目があった菖蒲は、ぱつと顔を伏せてしまった。なにか言いたそうな彼女を遮って、呆れたように藤里が口を出してきた。

「遠藤さん、女性をまじまじと見るのは失礼です。それに、菖蒲が怖がっていますよ」

「え…ああ、悪い悪い」

「さて、菖蒲。彼にあなたに洋画を教えて頂くよう頼んだのですが…よかつたらどうだい？」

「えっ…ぜ、是非お願いします!!」

興奮に瞳を輝かせて菖蒲は綺麗に腰を折った。

「俺がうまく教えられればいいんだけどなあ……」

「では毎週水曜日の午後にお願いできますか？前日が休みなので確実に客がいまさんから」

俺は藤里の提案を承諾した。

将棋に負けたことがきっかけだったが菖蒲と話してみると教えるのも苦ではなさそうだった。

六華

それからは仕事前の菖蒲に洋画の歴史や見方、技法等を教えるのが習慣になった。

菖蒲は専門書を読むだけあり、基礎的な知識はしっかりしていた。たった3ヶ月でほとんど教え尽くしてしまった。

「勉強の調子はいかがですか？」

いつものように菖蒲と過ごした後、華やかな雰囲気の中酒を飲んでいると藤里が尋ねてきた。

「さすがに飲み込みが早いな。もうそろそろお役御免だ」

あとは本人が努力するしかない。

「そうですか。ではせっかくですから菖蒲に何か描かせて見ましようか……」

藤里は遊女が年季があげた後のために様々な後押しをしている。

「…そうだ。あなたにモデルをお願いしましょうか」

「俺！？わざわざむさ苦しい男じゃなくて、楼の娘がいるだろう」

突拍子もない藤里の言葉に驚いた。

「菖蒲が見慣れていないもののほうがいいんですよ。うちの子の姿絵なんて見慣れてますからね」

「確かにそうかもしれないけどな…断る。モデルなんてめんどくさい」

画家であるからこそモデルの大変さを知っているのだ。

「では私と賭けをして私が勝ったらお願いしますか？負けたらこの間おっしゃっていた古酒をお譲りしますよ」

藤里のコレクションの一つであり値段が時価という逸品である。

「まじか！？じゃ、いいぜ。ただし将棋以外でな」

そして、次の水曜日。

「…ということで遠藤さんをモデルに一枚書いてみなさい。期日は1ヶ月。教わった成果を楽しみにしているよ」

藤里はにこやかに、しかしやんわりとプレッシャーをかけて言った。

「は…はい。頑張ります」

こうして俺はもうしばらく、毎週菖蒲のところに通うことになった。

「俺のような素人ではつとしない男がモデルで悪いな。旦那の中にはもっと見目のいい奴がいるだろうに」

「遠藤様よりいい旦那様なんてそうはいませんよ」

菖蒲はデッサンの準備をしていた。

「ま、俺は口を出さないから好きにかけ。…で、どんな絵にするつもりだ？」

今の格好は少し派手な着流し。

菖蒲の答えによつては着替えなければならぬ。

「くつろいでいらつしゃつて結構ですよ。どんな構成かは内緒です」

クスクスといったずらつぽく笑いながら菖蒲はデッサンを始めた。

「お前がどう考えているか知らんが…油絵を1ヶ月で仕上げるのは大変だぞ？」

油絵は絵の具を重ねるには一度乾かさなければならぬ。

「とりあえず明日明後日は楼に泊まつてるから、昼間時間があるよ
うなら早くデッサンをすませてしまえ。そうすればモデルも終わり
だし、集中してできるだろう」

菖蒲がデッサンを始めるととたんに遠藤は暇になつてしまふ。

七華

(さて…どうするかな。どんな絵にするつもりなのかは楽しみだが)

「菖蒲」

「はい？」

名前を呼ぶと手を止めて、顔を上げて答える。

「作業は止めなくていい。しゃべっていたら集中できないか？」

「いいえ、大丈夫ですよ」

そう言つて菖蒲は再びデッサンに戻った。

「せっかくだから話をしよう。今さらだが、歳はいくつだ？」

今までは洋画を教えるばかりで個人的な話はしたことなかった。

「21ですよ。遠藤様こそおいくつですか？」

「21か…じゃあそろそろ下の教育を任されるようになるな。菖蒲からみたら俺はいくつに見えるんだ？」

意地悪く笑つて尋ねると菖蒲は困つたような顔をした。

「俺は旦那じゃないから持ち上げなくていいからな。当てたらなにかご褒美をやるよ」

「ご褒美ですか？本当にあてちゃいますよ」

そう言つて菖蒲は俺をじつくりと見た。

「今さら見たつて変わらないぞ？

それにモデルの事は最初によく観察をして雰囲気をつかんでおくものだ」

「改めて見なくなつたんですよ。

うーん…藤里様が32歳でいらつしゃるのでそれ以上ですよね…」

器用にデッサンを続けながらも真剣に悩んでいるようだ。

「そんなお歳には見えないんですけどね。遠藤様も藤里様も」

「いや…藤里はそろそろやばいぞ？仕事もしないで毎晩酒を飲みながら将棋ばかりしてるからな。

メタボリック予備軍だぞ」

もともとの線が細い藤里だから今はまだ大丈夫だが、そろそろそうもいかなくなるだろう。

「えー！！それは考えたくないです…でも遠藤様も藤里様と同じ生活に見えますよ？」

「おいおい…俺は毎日紅伽楼にいるわけじゃないぞ？ちゃんと仕事もしてるし、ジムに通つたりもしてる」

菖蒲からみたら俺と藤里は確かに同じように見えるだろう。

「ちょっと話がずれたな…で、いくつだと思う？」

「そうですね…30、うーん…34歳？」

本当にわからないように首を傾げながら菖蒲が答えた。

すると遠藤は盛大に笑い始めた。

「あははっ…菖蒲はまだまだ見る目がないな。旦那に騙されないように気をつけたほうがいいぞ？」

あんまり笑ってしまったので菖蒲はむっとしたかと思っただ、予想に反して驚いた顔をして手も止まっていた。

「どうした？そんなに驚いた顔をして」

すると菖蒲は怪訝な顔をして言った。

「真面目に考えて出した答えだったのですが…そんなに笑われると言っことは検討違いって事でしょう？
いったい本当はおいくつなんですか？」

「44だよ。藤里より一回り上だ」

すると少しの間を開けて菖蒲が大きな声を出した。

「えー！！！！ほ…本当ですか？」

「嘘をつくわけないだろ？菖蒲の倍以上にもなる。
…手を動かせ。いつまでたっても終わらないぞ」

そう言つと菖蒲ははつとしてまたデッサンに取りかかった。

しかし随分と動揺しているようだ。

（そんなに驚かれるとは思わなかったな…話題には気をつけないと）

そんな菖蒲の様子を見て俺は思った。

その後は俺は菖蒲の集めた画集をみて過ごし、菖蒲の部屋を出た。

夕陽が鮮やかに中庭を照らしている。

ふとその光景を描きたくなり、俺はスケッチブックを持ち出した。

菖蒲に刺激を受けたのか開門まで集中してスケッチをした。

門が開くと楼のなかにはまた排他的で艶やかな空気が濃くなった。

八華

コンコン…

そろそろ正午になろうかというときに藤里の部屋を誰かが訪ねてきた。

「誰だい？お入りなさい」

「失礼します。おはようございます、藤里様」

訪問者は菖蒲であつた。

「菖蒲か、おはよう。どうしたんだい？時間が空いているのなら遠藤さんに来ていただきなさい」

遠藤は既に自室のように使っている客室にいるだろう。

「ええ、１時からお願いしてあります。」

実は藤里様にお聞きしたい事がありまして…」

「なんだい？」

藤里はこのタイミングで菖蒲が尋ねたいことなど遠藤のことだろうと予想をつける。

「遠藤様なのですが…」

そこまで言つて菖蒲はためらい、言葉を詰まらせた。

（なにがあつたんだ？まさか遠藤さんが菖蒲に手を出すとは思えないが…）

その様子に藤里はあらぬ邪推をしそうになる。

いくら遠藤でも商品である楼の娘に手を出されたら黙ってはいただけない。

「その…お歳が44歳っていうのは本当ですか？」

………

部屋に少しの間沈黙が落ちたあと藤里が口を開いた。

「なんだ、そんなことか。そうだよ？」

確かに見た目は30歳位にしか見えないけどね…」

すると菖蒲は安心と驚きの混じった表情をした。

「一瞬聞いたらいけない事かと思い緊張しましたよ。本当にそんなお歳になるんですね。驚きました」

「いや、菖蒲があんまり真剣だったからなんの話かと思っていたんだよ。」

さあ、用事はすんだかい？頑張りなさい」

そう言って菖蒲を送り出した。

九華

約束の時間に俺は菖蒲の部屋を訪れた。
昨日とそう変わらない着流し姿だ。

「さて、改めて何かわからないところはあるか？」

実際にやってみるとわからなくなることもしくない。

「いえ、うまくいってます。すらすらとイメージができてるので、
今日でデッサンは終わりにできますよ」

「そうか、それは完成が楽しみだな」

そう言っただけ俺は暇をつぶすために盃を傾け始めた。

しばらくすると菖蒲が話しかけてきた。

「遠藤様と藤里様はどのような関係なんですか？」

学校の先輩後輩の関係かと思っていましたが、まさかそんなに年が
離れていらっしやっただけですから…」

「ああ、似たようなものだ。兄弟って言っただけが感覚は近いかな。

俺は露宮の生まれなんだよ。だからまだ花街から出たことのなかった
あいつにいろんな事を教えてやってたのさ」

あっさりと言った俺に対して菖蒲は驚いたようであった。

「遠藤様は…露宮のご出身なのですか？」と、言うことはお母様は…」

「遊女だった。珍しいだろ？今もだが、昔も遊女の子なんて数も少ないし、みんな花街の仕事についているからな」

露宮でもある年齢までは学校に通うが卒業後はたいていお世話になつていた見世で働く。

学校に通っている間は花街から出ることは許さないことが原因だろう。

また遊女の子供は花街の中でもあまり風当たりがいいとは言えない。

「それはご苦勞をされたのですね。話にくい事を失礼しました」

「別にいいさ。それに俺は苦勞していないんだ。学校は『外』に行つていたしな。だから藤里にいろいろ教えていたのさ」

藤里の父親はもちろん紅伽楼の先代主人。たった1人の跡継ぎを『外』に出すのを極端に嫌がっていた。

そんな藤里に俺は勉強以外の、花街ではない世界を教えていた。

「だから仲がよろしいですね」

「まあな。…言いたくなければいいが、お前はいつ頃ここへ？」

花街の遊女となる理由は様々だが、多くの場合は大人の都合で売られてくる。

「私がこの露宮に来たのは12歳の時でした。小さな頃に両親を亡

くして身寄りがなく、小学校を卒業してこの世界に自分から入ったのです。

「

菖蒲は淡々と話した。

「へえ、１２歳ねえ…最初から紅伽楼にいたのか？
それにしても見覚えがないんだが」

俺は昔から紅伽楼をよく訪れていた。しかし、菖蒲を見た覚えは最近までない。

「初めはこのような奥まった所ではなく、もっと大門に近い所にいました。

紅伽楼に来たのはお客をとるようになった時…１７歳の時です」

花街では唯一『外』へ繋がる大門。

大門に近い見世ほど安く敷居が低くなっている。

「４年前か、俺は禿とは話したりするが遊女とは関わりがないからな…

それにしても、紅伽楼に引き抜かれてよかったな。ちゃんとした見世の方が客も常識的だから」

紅伽楼は露宮のなかで最高級と噂されている遊廓の一つである。
そのため客の社会的地位高くマナーがいいのだ。

菖蒲と俺はデッサンを続けながら様々な話をした。

菖蒲は禿時代に藤里が目をつけて高値で買い取られたらしい。

年季があけたら画家になりたいこと、旦那たちのあれこれなどを話しているうちに夕方になった。

「そろそろタイムリミットだが、デッサンは終わったか？」

デッサンさえ終われば毎回モデルがいる必要はない。

「はい…でも、明日までいらっしゃるのですよね？
でしたら明日も付き合って頂けません？」

菖蒲が不安そうに尋ねてきた。

「別にいいぞ。明日の夕方まではあいてるから、また呼んでくれ。
じゃあ大変だろうが絵も仕事も頑張れよ」

そう言っただけ俺は部屋を後にした。

その時の菖蒲のなんとも言えない表情は今となっては俺の言葉に傷ついたんだとわかる。

十華

そして翌日俺はいつものように菖蒲を訪れた。

「菖蒲、俺だ。入るぞ」

そう言っただけで襖を開けた。

するとそこには旦那であろう男と添い寝している菖蒲がいた。

（やばっ…泊まりの客か）

二人ともぐっすり眠っていたため俺はそっと襖を閉め、藤里の所に行った。

「おい、藤里！！菖蒲のところに客がいるなら言えよ。間夫みたいになるところだったぞ」

「今日も約束をしていたとは知りませんでした。お客様は？」

藤里は困ったように言った。

「二人ともぐっすり寝てたよ、心配するな。さて、夕方に大門が開いたら帰る。しばらく仕事でこれないけど気を付けろよ？」

意味深な言葉に藤里は微笑んで答えた。

「ええ、遠藤さんこそ気を付けないと、うしろから刺されますよ？」

「はいはい、じゃあな」

そう言って俺は露宮を出た。

コンコン…

藤里に言われた期限の前日、火曜の朝方に禿が閉門の時間を知らせるために襖を叩いた音で菖蒲は目を醒ました。

「う、ん…」

（もう朝方…旦那様を帰す時間だ。1週間…やっと今日はお休みだね。つかれた…それに絵は明日が締め切り。さすがに間に合わないな）

遠藤をモデルにした絵はまだ一度しか色を重ねていない。

これでも進んだ方である。最近、菖蒲を指名するある旦那がよく泊まってくため昼間も絵を描けない日が続いていたのである。ましてやこの1週間はずっと泊まっていた。

「旦那様、お時間です。起きてくださいませ」

隣でまだ眠っていた旦那を起こす。

「うん？…ああ、今晚は休みか。もう帰らないとだね」

いつものように身支度を手伝っていると真面目な声色で旦那様が話しかけてきた。

「菖蒲、大切な話なんだけど…君を身請けしたい」

はつきりと強固な意思が読み取れ、私は驚いた。

「私を…身請けですか？ですが旦那様には婚約者がいらつしやとお聞きしております。

いくら政略結婚であっても世間体が…」

「ああ…わかつているよ。

君を身請けしても共に暮らすこともできないし、明らかにできる関係にもなれない。

だから条件付きでいい。菖蒲の年季明け、25歳までの4年間でいい。俺の愛人になってくれないか？」

「私を…身請けですか？」

確かに今まで身請けの話がなかったわけではない。

しかし最近は昔と違い、妻として身請けされていくのが一般的である。

「あ、あの…」

戸惑っている菖蒲に旦那は優しく声をかけた。

「答えは急がなくていいよ。ゆっくり考えてほしい。

本当はきちんと妻として君を身請けしたい…菖蒲、君を愛してるんだよ。遊女としてでなく、一人の女性として」

旦那が帰った後、混乱はしていたがとにかく藤里に会いに行こうと

菅蒲は部屋を出た。

十一華

コン……コンコン……

遠慮がちなノックに藤里は書類から顔を上げ時計を見た。

（4時30分か…こんな時間に誰だ？）

「どうぞお入り下さい」

まだ楼に旦那がいてもいい時間であるために丁寧に対応する。

「菖蒲です、あの…失礼します」

藤里は訪ねて来た菖蒲は客をとるための艶やかな着物をまとったままであるのを不審に思いながら声をかけた。

「旦那様はお帰りになられたのかい？一週間ご苦労だったね。」

「はい、先ほどお帰りになりました。それでご報告がありまして…身請けをしたいそうです」

「なるほどね。確かあの方は婚約していたはずだが…菖蒲を愛人にとはまた思いきったことをするね。それで受けるのかい？」

藤里が尋ねると菖蒲は小さく首を横に振った。しかし…

「わかりません」

藤里は静かに先を促した。

「旦那様は私の年季が明ける25歳までだと…」

あと4年花街で過ごすよりは『外』で暮らしてみたいけど、私…あの方を好きにはなれなくて。

でも身請けされれば今よりずっと絵に時間が割けるし……どうしたらいいのか」

最後には涙声で菖蒲は言った。

「ごめんなさい…藤里様と約束したのに、明日が締め切りの絵も書き終わっていないくて」

「それについては気にしないでいい。ずっと泊まられていたんだ、仕方がない。」

明日遠藤さんが来てくださるから見て頂きなさい」

するとはつとしたように菖蒲は顔を上げた。

「遠藤様が…？」

そうついた菖蒲の顔はついさっきとは全く違い、明るいものであった。

（…困ったな。もしかしくなくても菖蒲は遠藤さんに惚れたか…）

「最近はお忙しくて来れなかったが、明日は空けてくれたようだよ」

考えを全く顔に出さずに藤里は微笑んだ。

「とにかく身請けの話は菖蒲次第だからね。よく考えてみなさい。相談にはいつでもものるから」

菖蒲が部屋を出ると藤里は大きなため息をついた。

（とりあえず身請けの話だな。菖蒲はこれからの遊女だからあまり手放したくはないが…いくらにしようか）

身請けなどきれいごとを言ったところで人身売買であり、営利が目的なのだ。

（あの方の身边をもう少し詳しく調べさせないと。

…それにしても、遠藤さんの方は困った。まさか菖蒲がね…だが遠藤さんならうまくやってくれるか。疲れたしお昼にはいらっしやるようだからもう休もう）

藤里は最終的には遠藤がうまく調整してくれるだろうと丸投げし、眠りについた。

十二華

そして昼時、遊女が起き出した頃に遠藤は紅伽楼を訪れた。

「よつ、約1カ月ぶりか？元氣そうでよかった。」

「遠藤さんこそ、個展のご成功にお祝い申し上げます。それに展覧会での評価、ずいぶんと噂を耳にしますよ。本当におめでとございます」

遠藤は先週自身の個展を開いていた。それに加え大きな展覧会で最優秀賞をとったためここ1カ月は大忙しである。

「ああ、わざわざ個展を見に来てくれたのに案内できなくて悪かった。ありがとう」

「ところで…あの絵、どうするんですか？」

「そうだな…いつか菖蒲にやるよ。あいつが花街を出ていく日にでも。ところで菖蒲の絵は？」

自分がモデルなのは恥ずかしいが、菖蒲がどんな画風になるのかは興味津々だ。

「それが…わざわざ来ていただいたのに大変申し訳ないのですが、書き終わっていないんです。」

菖蒲もいろいろあってここしばらく忙しくて…」

遠藤は肩を落としたように言った。

「そつかあ…楽しみにしていたんだが」

「仕方がなかったんですよ。書きかけですがまたアドバイスを
あげてください」

藤里がフォローを入れ、遠藤を菖蒲の部屋に促した。

襖が軽く叩かれた。

「菖蒲、私だ。遠藤さんをお連れしたよ」

部屋では菖蒲が絵を書いていた。

「あつ…いらつしゃいませ。お忙しいなか来ていただいたのに終わ
らなくて。本当にすみません」

「よう、久しぶりだな。元気そうだなによりだが…少し痩せたな。
絵はずいぶんと丁寧に進めていいが、身体は大事にしるよ？」

すると藤里が口をはさんだ。

「あなたが言えた話ではないでしょうが…」

仕事に没頭すると他のことなんて目に入らないんですから。」

「はいはい…さて、菖蒲。絵を見せてみる」

「はい、お願いします」

遠藤の指導が始まったため藤里は部屋をでた。

（さて…あとは任せましたよ？遠藤さん）

十三華

「なるほどね…大まかには十分合格点をあげられるできだな」

菖蒲の絵は繊細タッチだが色彩が鮮やかで印象的なできであつた。

「ありがとうございます！！…本当は完成したものをお見せできればよかったのに。」

せっかく遠藤様をモデルに書くのだから驚かせたかつたんですよ？」

「うーん、俺を驚かす、ねえ…菖蒲はどういった点でインパクトを与えたかつたんだ？はつきりいつて構図や背景、色彩、タッチ…特に珍しいところはないだろう」

すると菖蒲は驚いていった。

「確かに…そうですね。…全然考えていませんでした」

「お前はこの絵で何を訴えたいんだ？

人物画を写実的に書きたいわけではないだろう」

しばらくトッププロとして厳しい視点のなかにいたせいか言葉や要求がきつくなっていたことに俺は気づかずと言った。

「…すみません。いい絵にしたいということで精一杯で…」

「つまり何も考えていなかったんだろう」

「……すみません」

絵から視線を菖蒲に移して俺ははっとした。

菖蒲が本格的に絵を書いたのはこれが初めてである。しかもいくつもの制約のなか書いてきたことを考えると菖蒲の絵はよいできであったのだ。

「悪い…言い過ぎた。初めてなのに無茶言っただな。今度書くときの参考にしてくれ」

「いえ、すごく勉強になります」

「とにかく、この絵はこの調子でいい。気にするな」

そのあとは細かい技法についてしばらく指導をした。

「さて、こんなものだな。頑張れよ」

時計をみるとすでに5時近くであった。

「ありがとうございます。お疲れでしょう、お茶を入れますね。そういえば…今日は洋装ですね。何かあったのですか？」

お茶を入れながら菖蒲が尋ねてきた。

「別にいつも『外』ではこんな感じだぞ。楼に泊まると着物なだけだ」

今日は午前中に仕事をしてきたためスーツを着ていた。

「そうですよね…遠藤様は『外』で暮らしているんじゃないでした

ね」

菖蒲はなにか思い悩んでいるように視線を落とした。

「…『外』に出たいのか？」

俺の問いかけに菖蒲は下を向いたまま言葉を探しているようだった。

「そうですね。出たくないと言ったら嘘になります。『外』にはたくさん物がありますから…でも、『外』では自分で生きていかなくちや全然今と変わらないんでしょうね」

しばしの沈黙のあと菖蒲が言った。

十四華

「身請けの話があるんです」

「菖蒲にも恋仲の男がいたんだな。それにしても嬉しそうではないな…『外』が不安なのはわかるが、一人じゃないだろう」

俺は菖蒲の言葉を勘違いして言った。

「一人じゃない、ですよ。普通は…」

でも、私は好きな人と幸せになるために身請けの話がある訳じゃないんです」

「つまり、ただの旦那の一人から身請けを申し込まれたのか。だったらやめておくんだな。身請けは一生ものだ、後悔するぞ。どうせ年季があげれば自由の身。あと数年我慢した方がいい」

菖蒲は俺に自分の言いたいことがうまく伝わらないことに苛立った様子で話した。

「4年間なんです…4年間愛人として暮らせばあとは自由…でも、でも…」

俺は菖蒲の言葉を何も言わずに待った。

「でも、身請けされたらその間その人のものにならなくちゃいけない…今と違って向こうの都合に合わせなきゃならないし、ただでさえ不安なのに世間の目を気にしながら一人で生きていかなきゃならない。」

でも、それに耐えられたらいろいろな経験ができますよね。美術館やギャラリーに個展を見に行ったり、今より時間があくだろっからもっと絵を勉強できる…」

ここまで言うつと菖蒲は俺の目を見てしつかりとした口調で言った。

「それに私、遠藤様が好きです。絵の先生としてももちろん尊敬していますが、一人の男性として好きなんです」

その言葉に俺は少し驚いたものの、答えは決まっていた。

「そうか…悪いがお前の気持ちには応えられない。先に言うておくが、俺は誰かとそういう関係になる気がないんだよ…お前だけじゃなく他の誰ともな」

「…冷たいんですね。どうして？とか、可能性を全然残してくれないんだもの」

表現しにくい顔、諦めと寂しさがまじり、瞳は潤み始めていた。しかしその中に後悔や失望はなく微笑んでさえた。

「…伊達に長く生きてないからな」

しばらくの沈黙の後俺は言った。

「菖蒲、身請け話を受ける。俺は画家としてお前に期待している。もしお前にやる気があるならこれからも支援したい。4年間は確かに辛いかもしれないが…師としてなら側にいてやれる」

しばらく菖蒲は黙っていたが顔を上げ、意を決したように言った。

「わかりました、身請けを受けます…絵もちろん続けます。
でも、一つだけ…遊女菖蒲として最後にお願ひがあります」

「…なんだ？」

「抱いてください」

十五華

「明日、藤里様に身請けを受けるとご報告します。

だから、花街の今までの思い出とこれからの4年間を過ごすために……一晩だけ、一緒に過ごしてください」

俺は戸惑った。まさか菖蒲がこんなことを言うとは思わなかったし、その雰囲気にはけて引かない強さがあった。

（……女ってやつはこれだから怖い。たった21歳でこんな目をしやる……）

俺は初めて中庭で菖蒲を見た時を思い出した。

凜とした雰囲気を感じ、一挙一動は繊細。しかし会ってみるとその瞳には熱いものを秘めていた。

「わかった」

窓からは日が沈んだ後の薄明かりが差し込んでいた。

俺は菖蒲の腕をつかみ床に押し倒した。

「女を抱く時までいい先生じゃいられないぜ……いいんだな？」

菖蒲は目を閉じて頷いた。

「ん……ふぁ……」

いきなりの深い口付けに菖蒲は濡れた声をあげる。

俺は着物の帯に手をかけた。紺色に銀の花柄の着物の前を開くと若々しい身体に指を這わせる。

「きれいだな…」

俺は菖蒲の身体をゆっくりと溶かしていった。

「んあ…はあっ、んっ…」

部屋には密やかなお互いの衣擦れや水音が満ちていた。

「菖蒲、いいか？お前が欲しい…」

俺は菖蒲に負担をかけないように尋ねる。

「は…い、きて…」

誘うように菖蒲は俺の背に手を回す。それに応えて俺は身を沈めた。

「うんっ…あっ、あん…遠藤…様」

「こんな時に様付けか…？要だ」

「かなめ…さん？…はあ、あっ…」

「いい子だ…」

俺が言つと菖蒲はぎゅっと回した腕に力をこめ口付けをしてきた。

「うんっ…要さん…かなめさんっ…あっ、はあ…あんっ」

そうして俺達は互いに求めていった。

十六華

「…少し、話を聞いていただけますか？」

着物をはおり俺の隣で横になっていた菖蒲が話しかけてきた。

「前にも少し話しましたが、私が露宮に来たのは12歳の時でした。それまでは施設で大事に育てられてきたんです…」

俺はなにも言わずに耳を傾けた。

「ある日、私は偶然露宮の事を知りました。やりたいこともなかったし、施設にいつまでもお世話になるのが嫌で…周りの反対を押しきって門をくぐりました。もちろんどんな所かもわかっていました」

自分からこの世界に入る人間は少ない。ましてその歳で入ってくるなんてどれだけの勇気だったのか、俺は思った。

「最初はすごく驚いたけれど、みんなに優しい人ばかりですぐに慣れました。17歳になって遊女になった時ももちろん最初は悲しくはあったけど自然に受け入れられたんです。こうして花街を離れる事が決まるというんなことを思い出します…」

一度花街を出てしまえばなかなか帰っては来れない。

「遠藤様にはわがまま言っただけで頼りっぱなしでしたが…私、本当に頑張りますから…だから、これからご指導お願いします」

「ああ、もちろん…だが絵の事とかちゃんと旦那に話しあえ。4年間つつがなく過ごせるようになる」

「はい…」

しばらくすると菖蒲は眠ったようだった。頬には涙のあとが薄く残っている。

「…悪いな、菖蒲」

俺は菖蒲を起こさないようにそっと身支度を整えて部屋を出て藤里の所に向かった。

「…やってくれましたね」

部屋に入ると藤里は俺を睨んで言った。

「悪かった、遊女に手をだすなんてな…」

「本当ですよ！！…それで？」

藤里は態度を崩さずに先を促した。

「身請けされるってさ、気持ちの整理はさせたつもりだ。俺との事もちゃんと決着つけるだろ」

すると藤里は諦めたようにため息をついた。

「はあ…わかりました…今回だけですよ、本当に。まさか遠藤さんが菖蒲に手をだすなんてね」

「悪かったって…じゃ、そういうことだからいろいろ頼んだぞ。菖蒲が『外』に出てからの支援ができるように詳細が決まったら連絡してくれ」

俺はそう言って部屋を出ようとする藤里があわててひき止めてきた。

「ちょっと待ってください!!
このまま帰ってしばらくは来ないつもりなんですか？菖蒲にはなんて…」

「別に何も？ああ、そうだ。なるべく早くあの絵を送るから、菖蒲が身請けされる時に渡してくれ。じゃあな、またそのうち来るさ」

今度こそ俺は部屋をでて『外』へとむかった。

（次に菖蒲に会うときは一人の画家としてだ…頑張れよ）

大門をくぐりながらそう思った。

終華

2週間後、身請けの日を迎えた。金銭的な問題もなかったうえに、絵の話なども旦那は全て認めてくれたためにとん拍子に話は進んだ。

「失礼するよ、菖蒲。時間だが用意はいいかい？」

藤里が菖蒲を送り出すために部屋へ迎えにきた。

「はい、もう出れます」

「うちにいたのは4年間だったがよく働いてくれたね。いつも一生懸命な君の姿はみんなのいい見本だったよ。手放すのは惜しいがこれからは『外』で頑張りなさい。

…これを。遠藤様から菖蒲に。君が花街を出る時に渡してほしいと」
そう言つて藤里は一枚の絵を渡した。

「遠藤様が？わあっ…綺麗。これは、私？」

その絵は紅伽楼の中庭で花に手を伸ばしている遊女が描かれていた。艶やかな着物や花の造形までとても繊細に描かれている。…もちろん遊女の顔かたちや表情も。

「実は先日遠藤さんは個展を開かれてね。その時にその絵はとても話題になったんだよ。大事にしなさい」

藤里が言つと菖蒲は絵をぎゅっと抱き締めて言った。

「はい！！…すごい嬉しいです。」

藤里様、今回のことはご迷惑おかけしました。そして今まで本当に
お世話になりました」

菖蒲は深く頭を下げた。

大門をくぐるとそこは『外』。まだまだ本当に自由ではないけれど、
自分の選択に後悔は全くない。

（さようなら、みんな。

…大丈夫、私は一人じゃない。やりたいこともあるし、遠藤様だっ
て私に期待してくださってるんだ。

…うん、頑張ろう！！）

空は快晴。

真っ青な空に筆の後のような飛行機雲が浮かんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2045q/>

花街～菖蒲～

2011年3月27日18時43分発行